

極楽寺だより

2018(平成30)年4月号



発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派） ☎759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

春の永代経法座のご案内

慈しみの光あふれる春となりました。

生命の息吹を感じる時、お浄土の人となられた方々

が懐かしくしのばれます。

如来さまのおすくいのご恩、お育てのご恩を味わい、

仏祖のご恩を感謝して、春の永代経法要を次のとおり

おつとめします。お誘いあわせ、お参り下さい。

四月十一日(水)

昼一時半 夜七時半

四月十二日(木)

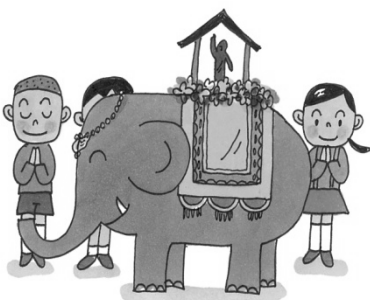
昼一時半

講師 東京 八王子市 延立寺住職

松本智量 師

花まつり

※ 甘茶お持ち帰りをご希望の方は、どうぞお申し出下さい。



四月八日は、お釈迦さまのご誕生を祝う花まつり。花御堂を飾り、お釈迦さまの誕生時のお姿に甘茶をかけてお祝いします。花御堂は、生誕の地「ルンビニーの花園」をあらわし、甘茶は「ご誕生の際に、甘露の雨が降った」という言い伝えによるものです。

極楽寺では、春の法要の二日間、本堂に花御堂を飾ります。

ご自由に甘茶をかけ、お飲み下さい。



声に出して、お念仏称えましょう
キャンペーン 第五弾

「南無」なもという態度

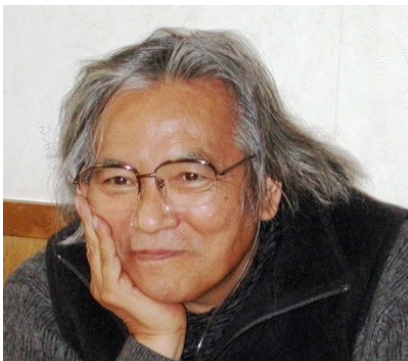
「南無阿弥陀仏」は、古いインドの言葉、サンスクリット語の読みを、漢字に当てはめたものです。昔はアメリカを「亜米利加」、フランスを「仏蘭西」と、読みを漢字に当てはめて標記していました。（今でもアメリカを米国、フランス仏国と表すのは、ここから来ています。）それと同じです。

「南無」とは、サンスクリット語のナマス (namas) という言葉からきたものですが、もとの意味は膝を折るといふことです。膝を折り、跪いて、敬いの心をあらわすというのが「南無」という態度です。自分中心、お金中心の消費者体質である現代社会において、縁遠く、見失われている態度ではないでしょうか。

愛知県の知多半島に 暁学園という特別養護施設があります。その園長をしておられた祖父江文宏さんという方がおられました。二〇〇二年に亡くなれましたが、虐待を受け

た子どもたち、様々な事情で親と一緒に暮らすことができないと、共に生きられた方です。真宗大谷派（東本願寺）のお寺のご出身で、親鸞聖人の生き様を常に意識しておられました。祖父江さんは、子どもたちとよく山へ出かけられていたそうです。山には掟があります。

一つは、火を焚く時には必ずまわりに「お願いします。火を焚かせていただきます」と言おうということ。これは、人に言うのではないのです。山に、自然に対して言うのです。二つめは、「お湯や油を熱いまま絶対に土に流さない」ということです。自然に申し訳ないと。そこに生きていくのちに申し訳ないと。驚くことに、これらは子どもたちが言い始めたことなのだとか。何と素敵な感性なんでしょうか！



祖父江文宏さん



祖父江さんは、こう言われています。

「人間が生きていくということは汚いことですよ。生き物と
いうのはそういうもんですよ。食べたなら排泄するんですも
ん。だけどそれに蓋をしてしまったところに、見なければなら
ない大切なものが見えなくしているような気がしてしかたが
ありません。不必要だったら、熱い油だって平気で土に捨てら
れる人間、汚いからと下水に流してしまう人間。そんな文明人
より、僕はうちの子どもたちのように、熱いものを土にこぼさ
ないんだ、それから火を焚く時も、「ごめんなさい。火を焚かせ
てもらいます」と、きちっと四方に言う。「頭を下げて言うん
ですよ。そんな子どもたちの生き方の方が、僕ははるかにすて
きだと思います。だいいち、そんな子どもたちの顔の方が生き
きとして、とつてもすてきですもん。この頃の日本人の顔は、
卑しい顔をしてるでしょ。」

（『子どもたちが観せてくれたこと』祖父江文宏）

近頃は、グランピングなるものが流行っているようです。

キャンプに興味はあるけれど、「火おこしやテント設営

が大変」「トイレが気になる」「虫が嫌」と敬遠する人のために、
煩わしさを取り除き、快適さを追求した新しいスタイルのキ
ャンプです。高級リゾートグループも展開しているようで、シ
ェフが屋外でダッチオーブンディナーを提供したり、冷暖房
完備のテントが用意されたりと、ホテル並みの設備やサービ
スが楽しめるのだとか。

しかしそれは、自分の快適な空間を、自然の中に持ちこんで
いる状態です。そして、自然を道具のように扱う態度であり、
暁学園の子どもたちの態度とは
全く違います。

私には気づかない世界があり、
その世界に迷惑をかけながらし
か生きられない自分がある。だ
からこそ、頭を下げて「ごめん
なさい。お願いします」と言
う。申し訳ないから「お湯や油
は、熱いまま土に流すのはやめ
よう」「これくらいはさせて



豪華なグランピング

もらおう」と、慎つつしもう。そして、そのことを忘れないでいようとする子どもたちの素晴すばらしい態度に、私は自分の生き方がとても恥はずかしく感じられました。子どもたちのような頭の下げ方を、まさしく「南無なむ」というのでしょう。膝ひざを折り、跪ひざまずいて、敬うやまついの心をあらわす態度です。

私の尊敬する宮城みやぎ顛しずか先生は、「南無なむ」とは茶室ちやしつに入るようなものだと言われています。茶室に入るときには、手を洗い、口をすすぎ、にじり口せま（狭くて低い入口）から膝を折って入っていく。これは、今までの自分の気分や思いを一度断たち切りき、新たな気持ちで入ることだそうです。自分の思いを持ち込まない。そして入った部屋には、その亭主ていしゅが客をもてなそうと、軸じくから花から使う道具から、あらゆるものに心が配くばられています。つまりお茶室とは、私をもてなそうという心で満みたされた世界であり、私に向けられた心に出会っていく場なのです。↘



そしてお互いの気持ちは、一期一会いちごいちえ。あなたと出会っているこの一時は、もう二度とめぐっては来ない。だからこそ、大切にしましょうという態度です。一期一会の心で、まなざしを向け合い、耳を傾かたむけ、出会いが開かれていく場が、お茶室の世界です。

それに対して、今の世の中は喫茶店きつさてんだと宮城先生は言われます。喫茶店きつさてんと言っても、常連客じょうれんきやくが語り合かたうような昔ながらのものではなく、今どきのチェーン店むきしつのような無機質な喫茶店きつさてんのことです。それぞれが自分の思いを持ち込み、自分の世界に閉じこもっていく場であり、そこには出会いはありません。

つまり「南無なむ」とは、「オレがこうしたい」という自分の思いを持ち込むのではなく、私に向けられている心に出会おうとする態度のことなのです。そして南無阿弥陀仏なむあみだぶつとは、この世界が、私を思う阿弥陀如来の願いに満ちている世界であることに気づき、その私に向けられている阿弥陀仏の心に出会おうとする謙虚けんきよな生き方だと教えられます。

そんな「南無なむ」の心を見失った姿を「邪見憍慢悪衆生じゃけんきょうまんあくしゆじやうじやう」（『正信偈しやうしんぎ』）というのだと、宮城先生は言われます。↙

「邪見」^{じやくけん}とは、自分だけという思いであり、どこにでも自分の思いを持ち込んでいこうとする態度です。そして、周りのもの^{まわ}を利用するだけで、頭を下げるということがない姿が「憍慢心」^{きょうまんしん}であり、「悪衆生」^{あくしゆじやう}とは嫌悪すべき生き方をあらわします。それは、四方^{しほう}へ頭を下げることを忘れた生き方であり、祖父江さんの言葉で言えば、「卑しい顔^{いや}になっている」姿です。

つまり、謙虚^{けんきよ}な態度を見失い、自分だけ、自分に関わる世界だけに生きていく傲慢^{ごうまん}な姿は、嫌悪^{けんお}されるべき生き方だと教えられるのです。私たちは、そんな悪衆生^{あくしゆじやう}の生き方になつてはいないでしょうか。卑しい顔^{いや}になつてはいないでしょうか。よくよく、生き方を見つめなくてはなりません。

また親鸞聖人は膝^{ひざ}を折り、跪^{ひざまず}いて、敬^{うやまつ}いの心をあらわす「南無」^{なむ}という言葉に、よびかけという意味も味^{あじ}わつておられます。あなたは何に「南無」して生きているのかと、呼びかけられ、問い返すうながしを「南無阿弥陀仏」というお念仏のはたらきに見い出されたのでした。

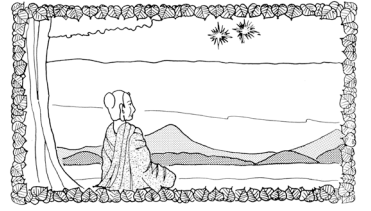
親鸞聖人はお念仏を称えながら、阿弥陀仏のよびかけ



を聞き、阿弥陀仏の世界に「南無」していく人生を歩まれました。そこから、周りのいのちを尊^{とうと}び、自分の人生を尊んでいく生き方が開かれたのです。

私たちは「南無」の態度を忘れてはいないでしょうか。何に自分の生き方を見つめ直さねばならないと、教えられるのです。 ■





極楽寺揭示伝道 けいじでんどう

み仏の智慧で
自分が
見えるように
なる



極楽寺揭示伝道

4月の言葉

よくお寺にお参りされる男性が、法座ほうざのご講師こうしにこんな質問をされたそうです。

「先生。こんなことを言うと笑われると思いますが、どうしてもわからないので教えてください。ご法話の中で、よく「仏様の光つに照らされる」とか「光に包まれる」とか言われますが、私にはどこに仏さまの光が届いてくださっているのか、どう包まれているのかわからないのです。太陽や月、電灯でんとうの光が照らしてくれている事はわかります。でも、仏さまの光に照らされるということが、わからないのです。」

真面目まじめな方なのですね。私のようないい加減かげんな者は、そこまですることはありません。でも、このように問うてくださる方があるからこそ、考えることができるのです。有り難く、

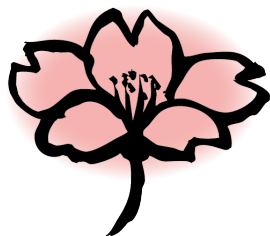
大切な問いかけです。

これは、阿弥陀様のはたらきを、光のはたらきに譬たとえているのです。では、光にはどんなはたらきがあるのでしょうか。

まず、暗闇くらやみに光が差し込むと、辺りあたの様子が見えてくるように、光には「そのものの姿を明らかにする」というはたらきがあります。

そして、光には「育てる」というはたらきがあります。植物は、水や肥料ひりょうがあっても、光がなければ育ちません。

また、日陰ひかげに生えている植物は、必ず光の方を向いて伸びていきます。つまり光には、「進むべき方向を明らかにする」はたらきがあるのです。



あるサラリーマンの方が夏の日に、バスに乗りました。ところが、そのバスは満員まんいん。おまけにあいにくの雨で、車内はムシします。しかも、蒸れて臭くさい。その上、赤ちゃんを抱かかえたお母さんが乗っておられていて、赤ちゃんが大声で泣くのです。人は多いし、暑いあつし、蒸れるむし、臭くさいし、赤ちゃんが

泣くし、そのサラリーマンの方は「最悪さいあくのバスに乗ってしまった」と思ったそうです。

すると、次の停留所ていりゅうじょが近づいた時、赤ちゃんを抱いたお母さんがバスを降りようとされました。バスの中は、ホツとした空気が流れました。そのサラリーマンの方も、「やれやれ降りてくれる」と安心したそうです。

その時、バスの運転手さんが、何気なくお母さんに「どこまで行かれるんですか？」とたずねました。

「この子が熱を出して、病院まで行きたいのです」

「えっ？病院って、まだかなり先ですよ。どうして、ここで降りるんですか？」

「いや、この子が泣いて皆さんに

迷惑めいわくをかけますから」

「でもこんなところじゃ、タクシー

もひろえませんよ。歩くつもり

ですか」

「はい。」

「今、雨が降っていますよ。それに、赤ちゃん熱がある」



んでしょ？」

「でも、皆さんに迷惑をかけるから・・・」

すると運転手さんは、おもむろにマイクをとり、こんなアナウンスをされました。

「皆さん、ここに熱を出した赤ちゃんを抱えたお母さんがおられます。目指す病院は、まだまだ先。でも、赤ちゃんが泣いて迷惑になってしまおうと、お母さんはここで降りて歩こうとされています。この辺りではタクシーもひろえません。外は雨です。歩くには、かなりの距離があります。皆さん、どうかしばらくの間、我慢がまんしていただけませんか」

一瞬車内はシーンとなりました。そして…

一人二人とパチパチパチと拍手が起こり、バスが拍手でいっぱいになりました。お母さんは赤ちゃんを抱いたまま泣きはじめました。そのサラリーマンの方も拍手をしながら、こう思っただそうです。「こんなに素晴らしいバスに乗れて、本当に良かった」と。

でも考えてみれば、状況じょうきょうはまったく変わっていません

よね。人は多いし、暑いし、蒸れるし、臭いし、赤ちゃんは泣くし。それが運転手さんの一言で、「最悪さいあくのバスに乗ってしまった」から、「最高さいこうのバスに乗れた」という気持ちに変わった。同じ状況でありながら、世界せかいが大きく変わったのです。

そして同時に、このサラリーマンの方は思われたのではないでしょう。 「僕は、お母さんがバスを降りようとした時に、「やれやれ良かった」と思ってしまった。もし、運転手さんの一言がなかったら、お母さんは雨の中長い道のりを、熱を出した赤ちゃんを抱かかえたまま、歩いていかなくはならなかった。そうさせようとしたのは、僕たちだった」と。

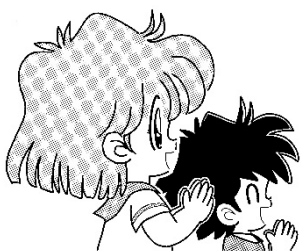
バスに乗っておられた人たちには、運転手さんは光輝ひかりかがやいて見えたと思います。そして、お母さんには、運転手さんだけではない、拍手した乗客の皆さんも光輝ひかりかがやいて見えたと思います。光に照らされるとは、まさにこういうことを言うのでしよう。気づかなかった大切なことに気づかされた。その大切なことを気づかずに粗末そまつにしていた、足蹴あしげにしていた自分の姿に気づかされた。そして進むべき方向が明らかになった。その方向へと一歩踏み出した時、その人もまた光輝ひかりかがやく存在となつ

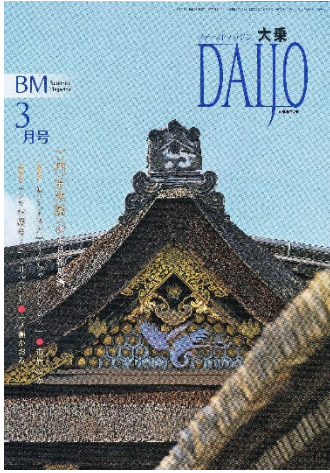
たのです。

親鸞しんらん聖人は「源空げんくう光明こうみょうはなたしめ」と言われています。源空とは、親鸞聖人の師匠ししょう、法然ほうねん聖人のことです。それは、法然聖人が、ピカッと光っていたわけではありません。法然聖人の言葉や生き様いきざまを通して、育てられ、導かれ、進むべき方向ほうこうが明らかになった時に、親鸞聖人にとって法然聖人は光輝ひかりかがやく存在に見えたのでしよう。そして、私たちの先輩も、親鸞聖人の言葉や生き様に触れて、親鸞聖人が光輝ひかりかがやくように見えた。その法然聖人、親鸞聖人を輝かがやかしたものは、まさに阿弥陀あみだ様の光でした。

阿弥陀様の光に照らされ、導かれ、育てられた方がいる。その先輩方の歩みがまた輝きとなり、長い歴史を通して、私のところまで届けられているのです。

「あなたもすでに、その光に包まれていることに気づいてください」とい
う、願いと共に。 ■





山口
長門市
池信宏證

1月15日、極楽寺御正忌報恩講の大速夜法要にお参りされた皆さんです。昔は、夜を通して本堂で語らい、朝5時におつとめをしていましたが、現在は午後11時におつとめしています。年々お参りが少なくなってきましたが、できる限りつとめていこうと思っています。



御正忌大速夜の写真が、本願寺の冊子『大乘』に掲載！

極楽寺御正忌報恩講・大速夜（1月15日）の写真が、本願寺の冊子『大乘』に掲載されました。真宗門徒は、長く親鸞聖人のご命日を大切に、報恩講を営んできました。金子みすゞさんも『報恩講』という詩を書いておられます。

「お番」の晩は雪のころ／くらい夜みちをお寺へつけば とても大きな蠟燭と とても大きなお火鉢で
明るい、明るい、あたたかい／「お番」の晩は夜なかでも ころころ足駄の音がする／

ここに出てくる「お番」というのが、この大速夜法要。真宗門徒が培ってきた大切な伝統行事です。長い歴史を通して伝えられてきた大切な営みも、ほとんどのお寺で失われてしまいました。どうか、これからも続けていけるよう、お参りください。よろしくお願ひします。

残念なことに…



前号で、長男・融也が「得度（僧侶となる研修・儀式）を受けます」とお知らせしましたが、残念なことにインフルエンザに罹ってしまい強制退所。改めて、受け直しとなりました。本人も残念がっておりますが、病気ですから仕方がありません。正式に受式した際には、改めてご報告いたします。

- ◆ 元世話人の名和田良作さん（市）、角村信忠さん（野波瀬）がご往生されました。長年お世話いただき、本当に有難うございました。



住職からの お願いです



夜の法座に、お参りください

このところ、法座へのお参りが少なくなり、また高齢化がすすんでいます。特に夜の法座は、めっきり少なくなりました。このままだと、いずれ夜の法座を勤めることができなくなりそうです。

忙しい時代です。しかし、「忙」とは、「^{こころ}心^なを亡くす」と書きます。忙しさの中で、大切な心を忘れ、亡くしてはいないでしょうか。ならば、なおのこと法座のご縁が大切になるはずですよ。

法座は、お参りに来られる方がなくては成り立ちません。長い歴史を通して伝えられた尊いご縁を支え、伝えるには、“あなた”のお力が必要なのです。

どうぞ誘い合わせ、お参りください。よろしくお願いいたします。

今回から夜の座は、短いお勤めで、
早めに終わるようにします。
夜七時半から、一時間くらいです。



昔むかしのお話です。ある村で、それぞれがお酒を持ち寄り、^{えんかい}宴会をすることになりました。そのうちの一人が、「一人くらいは、酒ではなく水を持って行ってもわからないだろう」と、^{とくすり}徳利に水を入れて行きました。さて、宴会が始まり、みんなで^{かんぱい}乾杯すると…、徳利

の中身はすべて水だったというお話です。「自分一人くらいは…」と思いはじめると、その場は成り立たなくなってしまう。私たちの先輩方が、大切に伝えてくださった法座を、受け継ぎ、伝えていくのは「私」の仕事です。「別に私が行かなくても、誰かが行くだらう」と思い始めると、もうそこで^{とだ}途絶えてしまいます。

「この私が、^{ひとはだめ}一肌脱がねば」と思ってください方、募集中です。どうか、どうか、夜の法座にお参りください。よろしくお願いいたします。(住職)

